

(研究報告)

## 卒後5年目を迎えた看護職の看護観とその影響要因 —看護基礎教育からの変遷—

Nursing view and factors influencing them among nurses in their fifth year  
of post-graduation: Transition from basic nursing education

山下真紀<sup>1)</sup> 神谷美香<sup>2),3)</sup> 武藤英理<sup>1),3)</sup> 清水八恵子<sup>1),3)</sup> 名和祥子<sup>1)</sup>  
Maki Yamashita Mika Kamiya Suguri Muto Yaeko Shimizu Shoko Nawa

### 抄 録

A 短期大学を卒業した元学生7名を対象に、卒後5年目の看護観およびその影響要因と、看護基礎教育から看護観がどのように変遷しているかを明らかにするために、調査研究を行った。自由記述による郵送自記式質問紙調査とし、得られた回答すべてを分析の対象としたところ、看護観として【安全・安心・安楽な生活を支える】、【患者・家族の思いに寄り添う】、【臨床判断から異常の早期発見、病気の予防につなげる】の3つのカテゴリーが形成された。また、看護観への影響要因としては、【看護実践の積み重ね】、【自分の看護を肯定できる経験】、【看護基礎教育の影響】、【多様な人間関係】の4カテゴリーが形成された。卒後5年目の看護観では、【看護基礎教育の影響】を基盤にし、【看護実践の積み重ね】をすることで、学生時代には抽出されなかった【臨床判断から異常の早期発見、病気の予防につなげる】という看護観が新たに形成された。

キーワード：看護観 卒後5年目 経年的変化

### Abstract

This study was conducted on seven former students who graduated from Junior College A to identify their views on nursing and the factors that influence them five years after graduation, and to determine how their views on nursing have changed since their basic nursing education. Self-administered open-ended questionnaires were mailed to the respondents, and all the responses obtained were included in the analysis. Consequently, three categories of nursing perspectives were identified: [Supporting safe, secure, and comfortable living], [Attending to the wishes of patients and families], and [Early detection of abnormalities and prevention of illness based on clinical judgment]. Four categories were identified as influencing factors on the view of nursing: [accumulation of nursing practice], [experiences that affirm personal nursing], [influence of basic nursing education], and [diverse human relationships]. In the fifth year after graduation, based on the [influence of basic nursing education] and [accumulation of nursing practice], a new view of nursing [from clinical judgment to early detection of abnormalities and prevention of illness], which was not present during the student years, was identified.

Keywords: nursing view, 5 years after graduation, secular change

1) 朝日大学保健医療学部看護学科

2) 修文大学看護学部看護学科

3) 元大垣女子短期大学

## I. はじめに

ナイチンゲールが初めて「看護とは何か（以下看護観という）」を言葉で示して以来、多くの国や職業団体が看護を定義し、理論家たちが看護観について唱えてきた。そして現在、その問いに対する考えは1つに定まっているわけではないものの、専門職業人として看護にコミットし、看護を実践するための基盤として求められるようになった。つまり、看護師個々の中に自己の看護観を持ち、発展させていくことが、現在の高度化・多様化する医療ニーズを的確に捉えながら質の高い看護を提供するためには必要不可欠である。

看護師の看護観の形成についての先行研究は、終末期ケアに従事する看護師や訪問看護師、病棟の管理師長、卒業後5年目以降の看護師など、様々な状況にある看護師を対象に行われている（野戸ら、2002；小野ら、2007；栗田ら、2015；畑中ら2016）。いずれも看護観は、看護実践による経験により形成され、意識をすることで次の看護実践に変化をもたらすものであり、その繰り返しによって発展していくことを報告している。

また、その看護観は、看護師として臨床に従事して初めて培われるものではなく、看護基礎教育の早期の段階から、看護学生自身が、学内での専門的な講義・演習や臨地実習での経験を統合し、自らの看護観として育成していくことができることが明らかとなっている（栗田ら、2010；小田ら、2015；石渡ら、2018；柳澤ら、2018）。そして、学生の看護観を育成していくことは、社会が求める看護師としての倫理観や責任感、人間性を育むとともに、看護の意味や価値を見出し、看護への志向性を高めることや、卒業後の自己の看護実践を支え、離職率の低下につながるということが報告されている（柳澤ら、2018；長谷川ら、2012）。

しかし、看護師・学生のどちらを対象とした先行研究も、ある時点での看護観や現状を報告したものであり、看護観が経年的にどのように変化し育成されたのか、ということは報告されていなかった。そこで、筆者らは、2013年度からA短期大学看護学科の学生を対象として、学生の3年間の看護観が、学年進行とともにどのように変化し育成されていくか、授業科目や実習体験との関連性を明らかにすることを目的として縦断的な研究を行った。その結果、1年次では、個人の身近な経験から看護を捉えていたところから、学問として専門的な知識・技術・態度を学び、実習で統合されることで学生の看護観が変化してきた（武藤ら、2015a）。2年次では各領域の看護学を学び演習や実習を行うことで、“生活の質”“対象の思い”“全体像”といった対象の捉え方が科学的に整理され具体的になった。また看護実践では、個別性があることを認識した上で、既習の知識や技術を用いて行動したことで、看護観に深まりが見られた（武藤ら、2015b）。3年次では、全領域実習や統合実習の特徴に合わせて、対象の捉え方や関わり方、看護実践に広がりや深まりをもたらす、看護を職業として認識し始め、現実的な看護のイメージが形成され、看護観として育成されていた（神谷ら、2019）。

このような経時的な変化をしながら育成された看護観は、臨床経験によってさらに発展していることが推測される。そこで、本研究では、卒業して5年経ち、それぞれの臨床で中堅看護師となって働いているであろうA短期大学の元学生を対象に、卒後5年目における看護観およびその影響要因を明らかにするために調査研究を行った。さらに、その結果を学生時代の看護観と比較・検討することで、看護観の変遷が明らかになったため、ここに報告する。

## II. 研究目的

- ①卒後5年目の看護観および影響要因を明らかにする。
- ②看護基礎教育開始から、卒後5年目における看護観の変遷を明らかにする。

## III. 用語の操作的定義

看護観：「看護とは何か」という問いに対する、その人なりの看護の考え方。

本研究は、研究協力者が全く看護について学修していない、短期大学入学時から実施している。研究協力者が考えやすく、回答しやすい問いにするため、上記のように定義した。

## IV. 研究方法

### 1. 研究対象者

2013年度にA短期大学1年次生であった学生の中から3年間継続して研究の協力が得られた18名のうち、事前に研究の趣旨を説明し、同意が得られた8名に質問紙を郵送した。研究実施時点において、看護師として臨床に従事して5年目となる。対象者の性別は、全員女性である。

### 2. 調査期間

2013年4月～2021年3月

対象者がA短期大学在学中に実施した7回の調査時期は表1の通りである。卒後5年目を8回目の調査とし、2020年11月～2021年3月の期間において、質問紙を配布した。

表1：第1回～第7回までの調査時期とA短期大学の専門科目の構成

年次		専門基礎科目	看護専門科目	発展科目	調査時期
3年次	後期		老年看護学実習Ⅱ／精神看護学実習	看護統合実習 看護研究／統合看護論	第7回 2015年11月末
	前期		小児看護学実習／在宅看護論実習 成人看護学実習(急性期) 母性看護学実習	終末期看護論／看護制度論 救急看護・災害看護	第6回 2015年7月末
2年次	後期	看護医療安全管理学 医療関係法令	成人看護学実習(慢性期) 老年看護学実習Ⅰ／老年看護学演習 母性看護学演習／小児看護学演習 在宅看護学演習／精神看護学演習		第5回 2015年1～4月
	前期	リハビリテーション論 社会福祉論 医療情報活用論 医療生命倫理	老年看護学援助論／成人看護学援助論(急性期) 看護過程実践実習／看護過程演習 母性看護学援助論／小児看護学援助論 在宅看護学援助論／精神看護学援助論 母性看護学概論／小児看護学概論 在宅看護学概論／精神看護学概論		第4回 2014年6・7月
1年次	後期	病態学 薬理学 歯科衛生概論	成人看護学援助論(慢性期) 老年看護学概論／成人看護学概論 成人看護学演習／生活援助実習 フィジカルアセスメント演習 治療支援技術論		第3回 2014年2～4月 第2回 2014年1月
	前期	公衆衛生学 人体と栄養／微生物学 生化学／病理学 解剖生理学	基礎看護技術論 生活支援技術論 看護概論		第1回 2013年6月

### 3. データ収集方法

郵送による自記式質問紙調査とした。①現時点で考える「看護とは」なにか、②なぜその考えにいたったのか、③考えに至った具体的な事実やきっかけ、④自分の考えにもっとも影響したと思うこと、⑤学生時代の学びから現在の自分の看護観に影響を与えていると思うもの、について自由記述で回答を得た。

### 4. 分析方法

回答された記述内容すべてを分析の対象とし、質的帰納的に分析を行った。本人の看護観に対する考え、および看護観の形成に影響を与えた出来事や考えなどが記載されている部分を抽出し、意味内容を損なわず、中心的な意味が明らかになるように要約し、コードとした。その中から看護観の形成に影響した内容を抽出し、相違点、共通点、類似点を比較して分類し、サブカテゴリーを形成した。さらに、サブカテゴリーの相違点、

共通点、類似点を比較・分類し、カテゴリーを形成した。分析の過程においては、データの解釈の妥当性を確保するため、質的研究の経験のある数名の研究者らとともにディスカッションしながら行った。

## V. 倫理的配慮

1回から7回目までの調査は、大垣女子短期大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号26-3）。8回目の調査は朝日大学保健医療学部看護学科研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号2020005）。研究の目的と内容、研究協力と中断の自由、不利益の排除、プライバシーの保護について記載した文書を質問紙とともに配布した。質問紙にある同意のチェックと、回答を以て「研究への参加の同意を得た」とみなすことを文書で説明し、質問紙の回収をもって研究への同意を確認した。

## VI. 結果

### 1. 対象者の概要

8名に配布し、7名より返信があった。7名全員が、新卒時は看護師として病棟に配属されていた。そして卒後5年経過した現在も看護職として従事しており、4名は病院における病棟業務、2名は外来または診療所、1名は保健師として従事していた。卒業後から配置換えや転職を経験しているものが4名いた。

### 2. 卒後5年目の看護観と影響要因

すべての記述を対象に分析を行ったところ、82のコードが抽出され、看護観では3つのカテゴリー、影響要因では4つのカテゴリーが形成された。以下、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを< >, 特徴的な記述を「 」で示し、カテゴリーを説明する。

#### 1) 卒後5年目の看護職の看護観（表2）

【安全・安心・安楽な生活を支える】、【患者・家族の思いに寄り添う】、【臨床判断から異常の早期発見、病気の予防につなげる】の3つのカテゴリーが形成された。

##### (1) 【安全・安心・安楽な生活を支える】

家族・多職種とも連携しながら、患者とその家族にとって安全・安心・安楽な生活を整えることが看護であると考えていることを示す。患者にとっての<安全・安心・安楽を考える>ことを基盤にし、<多職種や家族と連携・調整する>ことをしながら、<患者をサポートする>・<見守る>・<不安を和らげ安心させる>ことで、<患者・家族のQOLを高める>ことが看護であると考えていた。

「患者・家族が安心できるような環境を提供すること」

「患者その家族に対して治療や日常生活の援助を行い、QOLを高めること」

##### (2) 【患者・家族の思いに寄り添う】

患者・家族の思いを傾聴し、その思いを受け止め、寄り添うことが看護であると考えていることを示す。コミュニケーション技術を駆使しながら<患者の思いを聴く>ことをし、患者・家族が抱く様々な<思いを受け止める>。そして、<患者・家族に寄り添う>ことが看護であると考えていた。

「患者の安全・安心を第一に考え、寄り添うこと」

「患者・家族に寄り添うこと」

##### (3) 【臨床判断から異常の早期発見、病気の予防につなげる】

看護の視点で患者を観察・アセスメントし、患者の状態を判断できること、その結果を医療につなげることが看護であると考えていることを示す。<観察し、看護師としての判断ができる>ことが必要であり、その結果を医師や本人と共有することで<病気の予防と早期発見につなげる>ことが看護であると考えていた。

「患者さんを支え、病気の予防や病気の早期発見に努めることだと考える」  
 「病気をしている人のみではなく、病気をしていない人は病気にならないような予防をしていく手伝いをする」

表 2：卒後 5 年目の看護職の看護観

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
安全・安心・安楽な生活を支える	安全・安心・安楽を考える	患者の安全・安心を第一に考える
		安楽なケアを提供する
		日常生活援助を行う
	患者をサポートする	考えを受けとめ、サポートする
	患者をサポートする	身体的・精神的なサポートを行う
	不安を和らげ安心させる	不安を和らげる
		安心できる環境を提供する
安心感を与える		
患者・家族はその時々で様々な不安がある		
看護師の声かけ 1 つ、患者に希望を与える 看護師の声かけ 1 つで不安にさせてしまう		
見守る	患者を見守る	
患者・家族の QOL を高める	QOL を高める	
	家族の幸せの権利も考える	
多職種や家族と連携・調整する	退院支援を行う	
	家族や医師と連携する	
	患者や家族、各々の希望や思いを治療方針等と合わせて調整する	
患者・家族の思いに寄り添う	患者・家族に寄り添う	患者を支える
		患者・家族に寄り添う
		寄り添う
		患者さんに寄り添う
患者の思いを聴く	患者の思いを聴く	どのよう過ぎたいかを患者・家族に寄り添っていく
		患者の訴えを一番多く聞けるのは看護師である
		看護師としてコミュニケーションを重ねる
思いを受け止める	思いを受け止める	傾聴する
		思いをくみ取るのも看護師の役割
臨床判断から異常の早期発見、病気の予防につなげる	観察し、看護師としての判断ができる	身体・精神・環境への考えを受け止める
		患者のアンビバレントな思いを受け止める
		患者の様子をアセスメントし、医師に提案する
病気の予防と早期発見につなげる	病気の予防と早期発見につなげる	治療の介助だけではない
		医師の指示に従うことだけが看護師の仕事ではない
		観察することは大切な看護である
病気の予防と早期発見につなげる	病気の予防と早期発見につなげる	病気の予防や早期発見に努める
		病気予防の手伝いをする
病気の予防と早期発見につなげる	病気の予防と早期発見につなげる	入院していなくてもできることがある

2) 看護観への影響要因 (表 3)

【看護実践の積み重ね】、【自分の看護を肯定できる経験】、【看護基礎教育の影響】、【多様な人間関係】の 4 カテゴリーが形成された。

(1) 【看護実践の積み重ね】

看護職として経験してきた日々の業務や、様々な患者・家族との関わりなど、実践を積み重ねてきたことが看護観に影響していることを意味する。5 年間という年月において、＜多様な実践経験＞を積み、＜患者の思いに納得できる経験＞をしたこと、さらには、特定の出来事だけでなく＜日々の業務におけ

る患者・家族との関わり>が現在の看護観に影響を与えていた。

「日々の業務で、患者さんやその家族と関わっていくことでこのように考えるようになりました」

「看護師の声かけ1つで患者に希望を与えたり、逆に不安にさせてしまうと学ぶ場面が多くあったから」

## (2) 【自分の看護を肯定できる経験】

様々な患者・家族に対して看護を実践するなかで、患者・家族の反応からだけでなく、自分自身でも

表3：卒後5年目の看護職の看護観の形成に影響を与える要因

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
看護実践の積み重ね	日々の業務における患者・家族との関わり	日々の業務における患者と家族への関わり
		家族と関わる機会が増えた
		終末期患者との関わり
		患者・家族との関わり
		転院して数時間後に亡くなった患者を受け持った経験がある
		経験が浅い自分には大変な患者を受け持ったことがある
	多様な実践経験	看護師として働く経験
		過去に同じ疾患の患者を見た経験がある
		大きな病院の病棟と、診療所の外来の双方を経験していること 診療所の外来において医師のサポートをしている 診療所において、病気の早期発見をし、他機関に紹介したことがあった
患者の思いに納得できる経験	「お酒を飲むことが幸せだからやめられない」と言う患者の言葉 患者の思いに納得できた経験がある 患者の希望が定まっているということは難しい	
自分の看護を肯定できる経験	自分の看護を肯定する患者・家族の反応	患者から「一緒にいて落ち着く」「声が優しい」と言われたこと
		患者からの言葉で、不安が和らいでくれてよかったと思えた
		「あなたが担当でよかった」と言われた
		数年後、受け持ちだった人がリハビリで会いに来てくれた
		「あなたをみて、看護師になりたいと言っている」と言われた
		会いに行くだけで喜んでくれる患者がいた
		実際に関わった時間は短かったが、家族から感謝の言葉をもらった 患者さんが笑う 患者の笑顔をみて家族も喜ぶ
	自分の看護を肯定できる	患者に寄り添うことができたと思う出来事がある
		患者・家族が納得して退院した
		関わり方で患者・家族の反応は変わる あまり力にはなれなくても、せめて会いに行ったり、関わりは一番取ろうと思った 自分は何ができるのかを考え行動した
看護基礎教育の影響	学生時代の看護観	学生時は看護職が一番患者に寄り添える存在と考えていた
		学生時は対象者の希望をかなえられるよう支援することだと思っていた
		学生時代に寄り添うということを学んだ
	学生時代の実習体験	実習で患者さんと関わった経験
		在宅看護の実習で、家族とのかかわりが大きいと感じた
		学生時代の病棟実習の経験 実習などもよい経験だった 実習で出会った患者
多様な人間関係	多様な価値観をもつ友人	友人の恋愛相談などの日常会話を聞くこと
		大学に入り、今までとは異なるタイプの友人ができた
		友人の話をたくさん聞くこと
	学生時代の人間関係	教員、友人とであい、過ごした時間
		学生時代の友だちはいい子ばかりだった 学校が楽しかった

自分の看護を肯定できる経験をしたことが、看護観に影響していることを意味する。具体的な言葉など<自分の看護を肯定する患者・家族の反応>を経験しており、さらには自分自身で実践を振り返り、<自分の看護を肯定できる>経験が、現在の看護観に影響を与えていた。

「病棟でも今の職場でも、患者さんから『一緒にいて落ち着く』『声が優しい』と言ってもらったこと」「受けもち患者が退院するときに、『あなたが担当でよかった』と話してくれました」

### (3) 【看護基礎教育の影響】

学生時代の実習体験やそこで培われた看護観が、現在の看護観にも影響していることを意味する。<学生時代の実習体験>は、卒後5年を経た現在でも記憶に残っているものであり、<学生時代の看護観>が現在の看護観にも影響を与えていた。

「在宅看護の実習で、患者さんのケアはもちろん、家族を気かけたり家族とのかかわりが大きいと感じました」

「学生時代の病棟の実習での経験は影響していると思う」

### (4) 【多様な人間関係】

患者・家族といった看護の対象となる人との関わりだけでなく、友人などとの関係も看護観に影響していることを意味する。<多様な価値観をもつ友人>との関わりや、同じ看護職を目指していた<学生時代の人間関係>も、現在の看護観に影響を与えていた。

「学生時代は実習などもよい経験だったが、看護職を目指すというあまり今まであまり接してこなかったタイプの友人ができ、その話をたくさん聞くことに影響を受けたように思う」

「たくさんの素敵な先生と、友人に出会い、過ごしだ時間が何より働く時間で思い出すし、影響を与えてくれていると思います」

## 3. 入学から卒後5年目における看護観の変遷

1回目から8回目までの調査でえられた看護観の結果を表4に示す。対象の「生活を支える」こと、および「寄り添う」ことは、卒後5年を経過しても同じように考えていたが、「異常の早期発見、病気の予防」という考えが新たに抽出された。

表4：入学から卒後5年目における看護観の変遷

調査時期	短期大学1年次			短期大学2年次		短期大学3年次		卒後5年目
	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回
抽出された看護観	あらゆる健康連ベルにおいてより良い状態に導くこと	不安を取り除き心のケアをすること	多職種と連携しながら援助すること	対象の目標設定をして援助すること	安全安楽に生活を送れるようにすること	対象のニーズを充足するための根拠に基づいた支援	チーム医療の実践	安全・安心・安楽な生活を支える
	対象のニーズを把握し、精神的・身体的に対応すること	医学知識を藤堂し、身体的・精神的に対象を援助すること	対象の一番身近な存在として対象を理解し援助すること	対象の状況(病態・身体的・精神的・社会的)を判断して援助すること	対象の思いを尊重し、目標設定した援助をすること	対象に寄り添う姿勢	対象の強みを活かした支援	患者・家族の思いに寄り添う
	対象の状態だけではなく、対象を取り巻く全体を対象として支援すること	対象の持てる能力を引き出し、より良い生活への支援をすること	医学的知識を統合し常に考え実践すること	あらゆる健康レベルの対象にケアすること	情報収集アセスメントから対象の全体像を理解し援助を行うこと	対象の人生・生活の支援	対象に寄り添い尊重する姿勢	臨床判断から異常の早期発見、病気の予防につなげる
	身体的な援助をすること	対象とともに考え援助すること		対象とともに考え、対象中心の援助を提供すること	個別性のある支援	対象の強みを生かした支援	対象にとって安全で安心な援助の実践	
	事象を科学的根拠をもってとらえ実践すること			対象を支え、援助すること	対象に寄り添うこと	対象の家族を支える援助	対象と家族の生活を支える援助	

## Ⅶ. 考察

### 1. 卒後5年目の看護職の看護観とその影響要因

卒後5年目の看護師は、【安全・安心・安楽な生活を支える】、【患者・家族の思いに寄り添う】、【臨床判断から異常の早期発見、病気の予防につなげる】ことが看護であると考えていた。先行研究においても、「QOLの向上」(野戸他, 2002)や「人として家族に寄り添いともにある関係性を育む」(小野他, 2007)という看護観が抽出されており、本研究もそれらを支持した結果となった。看護師の業務は、保健師助産師看護師法第5条において、「療養上の世話」と「診療の補助」が定められている。そのため、日々の業務において実践していることとして、【安全・安心・安楽な生活を支える】こと、さらには、患者・家族にとっての安全・安心・安楽を理解するためにも【患者・家族の思いに寄り添う】ことが看護であると考えていると推察される。

また、【臨床判断から異常の早期発見、病気の予防につなげる】ことも看護であると考えていた。「医師の指示に従ってケアしたり、投薬することだけが看護師の仕事ではない。」という記述もあり、単なる「診療の補助」ではなく、看護師として患者の状態を判断できること、その結果を医療につなげることが看護となると考えていると推察される。さらには本研究の対象者には、外来や診療所に勤務するもの、また保健師として従事しているものを含んでいる。そのため、「異常の早期発見」や「病気の予防」が看護観として形成されたと考えられる。

そしてその看護観は、【看護基礎教育の影響】を基盤に、【看護実践の積み重ね】や【自分の看護を肯定できる経験】することで形成されていた。さらには、日常生活における【多様な人間関係】も、自分自身の看護観に影響を与える要因となっていた。

今回の対象者7名の中には、配置換えもしくは転職等を経験している者もおり、多様な経験が【看護実践の積み重ね】として、現在の看護観の形成に影響を与える要因となったと考えられる。また、その実践のなかで【自分の看護を肯定できる経験】が看護観の形成に影響を与えていた。畑中ら(2016)は、看護ケアの承認による看護への自信を得る過程を繰り返し、体験の積み上げによって、看護観の確立に至るとしている。本研究においても、【看護実践の積み重ね】と【自分の看護を肯定できる経験】が看護観への影響要因として抽出されており、先行研究を支持した結果となった。しかし、畑中ら(2016)は、看護観の発展には、自己の看護が揺らぐ体験に直面した看護師が、体験との向き合いにより、自己の考え方の広がりを得てめざす看護が定まるという看護観形成過程があることも明らかにしているが、本研究においては「看護が揺らぐ体験」が研究対象者によって記述されることはなかった。自由記載による記述式の調査のため、自分自身の否定的な経験は記述されにくいことが影響していると考えられる。また対象者も7名と少なく、経験年数も全員5年と決して長くはない。今後も縦断的研究を継続し、ストーリーラインを分析するなどし、看護観の形成過程をより一層検討していく必要がある。

更には、【看護実践の積み重ね】だけでなく、【多様な人間関係】も看護観の形成に影響を与えていた。先行研究においては、看護観に影響を与えるものとして、「患者」、「経験」、「先輩」、「体験」、「家族」、「実習」などが特徴的な語として抽出されているが、看護の対象や実践の場とは関わりのない語は抽出されてはいなかった(鈴木他, 2022)。本研究において、看護専門職者として関わる場以外においても、看護観に影響を与えていることが新たな知見として得られた。日常生活においても、多種・多様な価値観をもつ人々と関わることで、看護の対象となる人にも様々な人がいることを理解し、そのような人々と関わるのが看護観の形成にも影響を与えていると推察できる。しかし、そこには、実践の場だけでなく、常に日ごろから看護を意識するという、研究対象者の「看護職」としての意識の高さも影響していると考えられる。看護職としての職業意識などと合わせ、さらに研究を深める必要がある。

### 2. 学生時代から卒後5年目にかけての看護観の変遷

卒後5年目で抽出された【安全・安心・安楽な生活を支える】、【患者・家族の思いに寄り添う】という看護観は、3年間の看護基礎教育時に抽出されたカテゴリーが内包される概念となった。【看護基礎教育の影響】を基盤

にしながら【看護実践の積み重ね】をすることで、看護観がより科学的に整理され、形成されたと考えられる。

3年間の看護基礎教育期間では、抽出されたカテゴリーにおいて「対象」が頻出しており、対象をどのように捉えるか、どのように支援していくか、を看護の中心として考えていることが伺える。3年間の看護基礎教育期間において、対象のとらえ方や関わり方に広がりや深まりがもたらされ、対象を「生活者」と捉える基盤が形成されたと考えられる。そして、5年間の臨床における看護実践を積み重ねたことにより、「看護とは何か」を考える際の中心が、「対象者」から「対象者の生活」に移り変わり、対象者の生活を支える具体的内容が看護観として記述されたと考えられる。対象を「生活者」として捉え、その生活を支えることが看護であると考えていると推察される。

また、【患者・家族の思いに寄り添う】ことは、看護基礎教育から変わらない看護観として抽出された。「患者の訴えを一番多く聞けるのは、看護師だと思うから」という記述があり、看護職として経験を積み重ねる中で、患者・家族にとって一番身近な医療者は看護職であることを実感していることが伺える。そして、「寄り添う」とは、対象者の心情を理解し、その辛さを少しでも軽減したいという思いを持ちながら、対象の思いに配慮して関わり、信頼関係を構築しながら、専門的な知識を活用しつつ親身になって共に考え、対象のペースに合わせて、一緒に歩いていくことである(岡, 2020)。看護基礎教育期間における看護観は、臨地実習の経験に大きな影響を受ける(神谷他, 2020)。実際に患者を受けもち、看護を実践するという実習経験から、「寄り添う」ことを看護として学び、5年間の臨床経験において「寄り添う」ことを看護として実践したことで、【患者・家族の思いに寄り添う】ことが看護観として明確になったと推察される。

さらに、卒後5年目では、新たに【臨床判断から異常の早期発見、病気の予防につなげる】という看護観が抽出された。本研究では、看護観を「『看護とは何か』という問いに対する、その人なりの看護の考え方」と定義したが、萩野谷ら(2019)は、概念分析の結果から「看護の対象者と対峙し自己の看護を俯瞰することを通して、看護に対する自己洞察から得られる看護専門職業人としての行動指針となる価値観である」と定義している。5年間という臨床経験を経たことで、「看護専門職業人としての行動指針」として、「異常の早期発見」や「病気の予防」という概念が抽出されたと考えられる。

## VIII. 研究の限界と今後の課題

本研究は、自由記述における記載内容を分析の対象としており、研究対象者の文章表現によるものである。文章表現が苦手であり、自身の看護観を十分に表現しきれなかった対象者もいる可能性があり、得られたデータには限界がある。また、対象者数も7名と少なく、一般化するには限界がある。さらには、対象者は短期大学における看護基礎教育のため、大学化が進み、4年制大学卒業の看護師が増えている中で、教育背景も限定的である。今後は、対象者を増やし、看護基礎教育の影響をどのように受けながら看護観が育成されていくのか、より一層の研究が必要である。

## IX. 結論

卒後5年目の看護職の看護観を分析した結果、以下のことが明らかとなった。

1. 【安全・安心・安楽な生活を支える】、【患者・家族の思いに寄り添う】、【臨床判断から異常の早期発見、病気の予防につなげる】という3つの看護観が抽出された。
2. その看護観には、【看護実践の積み重ね】、【自分の看護を肯定できる経験】、【看護基礎教育の影響】、【多様な人間関係】という4つの要因が影響していた。
3. 【看護基礎教育の影響】を基盤にし、【看護実践の積み重ね】をすることで、卒後5年経過した時点では【臨床判断から異常の早期発見、病気の予防につなげる】という新たな看護観が抽出された。

## 謝 辞

本研究の実施にあたり、仕事と家庭と多忙な状況にあるにも関わらず、調査にご協力くださいましたA短期大学の元学生の皆様に心より感謝いたします。彼女たちの今後の活躍を祈念するとともに、心から応援しています。

本研究において、開示すべき利益相反事項はない。

なお、本研究の一部は 第41回日本看護科学学会学術集会で発表した。

## 文 献

- 萩野谷浩美, 日高紀久江, 森 千鶴 (2019). 「看護観」についての概念分析, 看護教育研究学会誌, 11 (1), 15-24.
- 長谷川美貴子 (2012). 看護学生における職業社会化と職業意識の関係性. 淑徳短期大学研究紀要, 51, 167-184.
- 畑中純子, 伊藤 収 (2016). 看護観が体験から発展するまでの看護師の思考のプロセス. 日本看護科学会誌, 36, 163-171.
- 石渡智恵美, 菱刈美和子 (2018). 周手術期実習における ICU・HCU 看護実習を体験した学生の学びと看護観に関する研究. 帝京科学大学紀要, 14, 111-116.
- 神谷美香, 武藤英理, 清水八恵子, 須賀京子 (2019). 看護観育成の構造 (第3報) - A短期大学学生の3年次における看護観の特徴と変化-. 朝日大学保健医療学部看護学科紀要, 6, 17-26.
- 栗田孝子, 橋本麻由里 (2010). 学士課程の看護基礎教育を考える - 卒業時の学生が捉えた「看護観とその形成に影響を及ぼした事柄」から. 相山女学園大学看護学研究, 2, 17-22.
- 栗田孝子, 星野純子 (2015). 病棟看護師長の看護観に関する質的帰納的分析. 日本看護医療学会雑誌, 17 (2), 34-41.
- 武藤英理, 栗田孝子, 神谷美香 (2015a). 看護観育成の構造 (第1報). 大垣女子短期大学紀要, (56), 107-112.
- 武藤英理, 栗田孝子 (2015b). 看護観育成の構造 (第2報). 第19回日本看護管理学会学術集会抄録集, 289.
- 野戸結花, 三上れつ, 小松万喜子 (2002). 終末期ケアにおける臨床看護師の看護観とケア行動に関する研究. 日本がん看護学会誌, 16 (1), 28-38.
- 小田亜希子, 武藤雅子, 小林幸恵 (2015). 看護大学生の看護観に関するテキストマイニングを用いた分析. 活水論文集, 看護学部編, 3, 3-21.
- 岡美登里 (2020). 日本における「寄り添う看護」の実践内容に関する文献検討, 滋賀医科大学雑誌, 33 (2), 1-8.
- 小野若菜子, 麻原きよみ (2007). 在宅高齢者を看取る家族を支援した訪問看護師の看護観. 日本看護科学会誌, 27 (2), 2\_34-2\_42.
- 鈴木康宏, 菅谷しづ子, 高橋方子 (2022). 看護観に対する看護理論の影響に関する看護師の認識, 千葉科学大学紀要, 15, 15-22.
- 柳澤恵美, 林 真理子, 小松法子, 今井淳子, 能見清子 (2018). 初年次看護学生が日常生活援助を受けた当事者の語りから得た看護観. 創価大学看護学部紀要, 3, 25-34.